

武庫庄



令和8年2月16日

繋がれるバトン、輝く日常

校庭に注ぐ陽光が春の気配を運んでまいります。保護者の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、先日、親族を見送るという経験をいたしました。静まり返った控室で故人の生前の歩みに思いを馳せたとき、私の心に浮かんだのは「命のバトン」という言葉でした。私達の命は、決して自分一人の力で咲いているのではありません。幾世代にもわたる先人たちが、どんなに困難な時代も懸命に生き抜き、大切に、大切に繋いできてくれたからこそ、今、私達はここに存在しています。このバトンには、単なる生物学的な連続性だけでなく、「幸せになってほしい」という無数の願いと祈りが込められているのだと、深い喪失感の中で改めて痛感いたしました。

私達は日頃、朝起きて、学校へ行き、家族と食卓を囲むという「当たり前の日常」を過ごしています。しかし、この平穏な日常こそが、実は最も尊く、壊れやすい奇跡の積み重ねであることに、失って初めて気づかされることがあります。騒がしいほどの子ども達の笑い声、教室に響く音読の声、友達と競い合う足音——。これら一つひとつの風景は、決して約束された永久不変のものではなく、多くの奇跡が重なり合って現れている「今」という一瞬の輝きなのだと思います。

私達の仕事は、この「命のバトン」を子ども達に確かに引き継ぎ、彼らがその重みと尊さを自覚できるよう育むことにあるのではないのでしょうか。自分がどれほど多くの願いに支えられて存在しているかを知ることは、自分自身を大切にする心「自尊感情」を育てます。そして、自分の命がかけがえのないものであると知るからこそ、隣にいる友達の命もまた、同じように誰かの願いに支えられた尊いものであると想像し、慈しむことができるのです。

学校は、知識を授けるだけの場ではありません。「当たり前の日常」がいかに有り難い（有り難い＝有ることが難しい）ものであるかを学び、互いの命を尊重し合う感性を磨く場でありたいと考えています。子ども達が失敗に挫けそうになったとき、あるいは自分の価値を見失いそうになったとき、私達は「あなたの後ろには、あなたを支える無数のバトンがあるのだよ」と伝え続けたいと思います。

親族との別れは私に大きな悲しみをもたらしましたが、同時に、子ども達の前に立つ、あるいは校門で子ども達を迎える一分一秒がいかに神聖なものであるかを教えてくれました。

今、目の前にある子ども達の輝きを、一瞬たりとも疎かにせず、精一杯の愛情を持って育てまいります。

「今、ここにある命」への感謝を、ご家庭と共に分かち合いながら、子ども達の輝かしい未来を支えていければと願っております。今後とも、本校の教育活動への変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。